

春夏秋冬

台湾徒然



第44回

「紅葉精神」

本稿執筆中、ちょうどワールドベ-

スポーツクラシックが閉幕し、日本が無事に連覇を果たした。一方、台湾は本大会参加チーム中、最も早く地域予選の会場を去ることになってしまった。盛り上がるはずの日本とは一度も戦わずじまい。しかも中国とは、北京オリンピックに続いての惨敗である。

台湾人は野球を「国技」と称する。確かにロサンゼルスでは銅、バルセロナでは銀を獲得している。オリンピックで最も関心の高い競技種目であった。台湾人の野球熱を支えてきたのは、プロでも高校でも実業団でもなく、実はリトルリーグである。1969年から1996年の間に17回世界制覇を成し遂げているというのだから、これまたすごい実力である。しかしその過程に、少年野球にあつてはならない不正常な操作があつたとして、97年以降連盟本部から出場辞退を求められるに至り、その面目を失うのである。

実はその不幸な年から台湾大会で三連覇したチームがある。台東市立南王小学校野球部。全校児童百人に満たない小さな学校で、その大半が原住民ユマの子弟である。実は台湾で現在流通している500元札。その表をよくみていただきたい。中央に大きく印刷されているのは、98年度、彼らが優勝した瞬間の写真である。台湾でのリトルリーグのもつ存在感を象徴しているともいえる。

この少年野球熱の発端をつくった事件が二つある。一つは、日本時代の31年に甲子園大会に出場した嘉義農林。なんと、準優勝を果たした。もう一つは、68年のあの「事件」である。

同じく台東県の山中、原住民プマンの子弟が通う紅葉小学校。南王よりさらに小さく、環境も劣悪であつたこの小学校が日本代表を破るという事件が台北球場を舞台に降つて湧いた。

日本代表は世界大会で優勝し凱旋



現在流通している500元札の表を飾る南王ナイン

したばかりの和歌山リトル。相手は装備さえ十分とはいえない原住民チーム。単なる交流試合のはずだった。しかしマスコミはこれを「日台決戦」と位置づけて生中継し、全島民の目が球場に注がれることになる。そうした愛国的高揚のなか、紅葉小学校は日本代表を7対0で完封勝ちした。台湾中は沸騰し、彼らは英雄となり、故郷には博物

館が建つた。

棒切れのバット、石ころのボールで練習する少年たちを見習え、台湾は不屈の精神で世界を目指すのだと号令かけられた。「紅葉精神」と名付けられ、これが台湾の聖なる代名詞となった。確かに、孤立を深める70年代を人々は紅葉精神でたたかいてきたのだ。しかしその後明らかになったのは、

実際にあの台北での試合に出場していた選手の大半が小学生ではなく、中学生だったということである。紅葉小学校児童の偽名を使って出場し、期待通り日本を打ち破り、「英雄」となった彼ら。しかしその後、彼らは決して幸せとは言えない人生を送り、その多くが40代にして亡くなつていったという。

500元札を飾つた南王小学校の選手の姿には、そうした過去への贖罪の意味も込められている。南王の選手たちもいまはもう成人。どのような後半生を送っているのだろうか。

柳本 通彦

やなぎもと・みちひこ
京都市生まれ。99年度「潮質」ノンフィクション部門優秀賞受賞。著書に「台湾先住民・山の女たち」の聖戦（現代書館）「台湾革命」（集英社新書）「明治の冒険科学者たち」（新潮新書）など。最新刊に「ノンフィクションの現場を歩く 台湾原住民族と日本」（かわさき市民アカデミー出版部）